

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③⑤

苦悩の場所で光に遇う

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第86回と87回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、この両回で第十七願成就文について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第84回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 本当に自分が出遇^あってたすかるかどうか勝負

出遇った仏教が本当に自分を解放するかどうかということ、自分の全力をかけて、自分の言わば命をかけて求めて、『無量寿経』こそが本当の仏教、真実教であると親鸞は信じた。あっちにも真実がある、こっちにも真実がある、比較してどっちかと、そのようなことではないのです。自分にとってはこれしかない。愚かな自分にとってはこの教えであれば自分を解放してくれる。そのようなことに出遇ったから、それまで学んできた比叡山の学びを捨てた。親鸞が尋ねて、これが真理だと言ってくださったその真理は、われわれのような愚か者にとって、今でも当てはまる。それ以後の人間が、とてもそこまでは掘り下げられないほど人間の闇を深く掘り下げてくださった。その真理性というのは、その親鸞の言おうとしたことを尋ねることで、われわれのような愚か者が「ああ、そうか、こういうふうに考えればたすかるのだ」という意味の真理性です。

つまり、本当に自分が出遇ってたすかるかどうか

かが勝負なのです。精神的な闇が開かれる真理性。これは客観的な真理性ではないのです。精神の明るみを求める心は、客観的な真理ではたすからないのです。いくら科学が客観的な真理を分析して、科学的に真理だと言っても、そのようなもので人間の心の闇は晴れないのです。心の闇を晴らすということは、人間がどういう存在であるか、自分は本当にどういう存在であるかが照らし出されて、「ああ、そのとおりでありました」と。何も無理することもないし、頑張ることもない。この通りの人間でありますと開かれることによってたすかるわけです。科学的に分析して、細胞が何億ありますか、なかの遺伝子がどうなっていますとか、そのようなことをいくら聞いても何もたすかりません。そのようなことは、どうでもよい。今、自分の心が暗いのをどうしてくれるのだ。そのような問題は科学的真理と違うわけです。そこが一番の問題です。

■ 苦悩の場所を生きていく

われわれはどこまでも暗い、どこまでも闇である。闇があっても、闇に苦しまないで、闇を引き受けて歩んでくださる法蔵菩薩が存在するということが、本願のはたらきとしてわれわれに聞こえてくると、阿弥陀の光が差してくる。ですから親鸞のような、自覚的に自分が罪業深重であることに苦しまれた方にとっては、この法蔵願心があるがたい。そして、阿弥陀の光が「南無阿弥陀仏」の名となって呼びかけてくださることが、自分のような愚か者にとっては本当に唯一の救いである

と。ですから法然上人が行くところなら自分と一緒にいきますと。もし、地獄に行くなら地獄に行ってもよいですと。地獄にも阿弥陀の光は来るのだと。そこまで信頼するわけです。自分は楽なところに行きたいのではない。苦悩の場所であろうと何であろうと、光に遇える、そういう場所を生きていくのだと。これが、親鸞の決断です。

これが、われわれにとっては大変勇気を与えられるのです。どうしても宗教というのは、苦しいから楽なところ、つらいから楽しいところ、暗いから明るいところに行ける。このようにイメージして、よいところに行けると考えてしまう。闇の人間に明るみが来ると教えるのですけれど、その明るみは本当は、闇が明るくなるというよりも、闇に苦しんでいた心が明るくなる。闇が単なる闇でなくなって、闇を生きることが自分の人生の意味になる。そういうことにおいて闇は単なる闇でない明るみの場所になるわけです。このような道が仏教の自覚だと思うのです。

これはなかなかわからないことです。どうしても相対的に、暗いところから明るいところへ行けるのだと考えてしまう。それで教えを聞いたり、一生懸命求めたりするけれど、いつまでたっても闇が晴れない。それで、聞き方が悪いとか、努力がたりないとか、^あ挙げ句の果てに教えが悪いなどと言って、たすからない。結局、それは、間違っている意識が^{ひるがえ}転換され^あされるといことが、なかなか自分のこととして受け入れられないのです。受け入れられないから、生きているうちはだめだ、死んでからだということを平気で言い出す学者がいるわけです。われわれの眼を翻しさえすればよい。どうやったら翻るのですか。自分では翻せない。人間の努力ではできません。本願が与えたいと言っているのです。その本願を「南無阿弥陀仏」を通して信じますという、その信じた心には、もう大涅槃はきているのです。ただこのこと一つを信じなさいと。そのような教え方が『無量寿経』なのです。（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

(2015年11月～2016年1月) 一抄一

■ 2015年

- 11/7 国際仏教学大学院大学 平成27年度第2回公開研究会(国際仏教学大学院大学): 藤原研究員発表「日本古写経『弁正論』と親鸞『教行信証』」
- 11/9 第181回英訳『教行信証』研究会 第86回(通算第137回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/13 ご命日のつどい
- 11/16 第31回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会
- 11/17 第18回『西方指南抄』研究会
- 11/30 第159回清沢満之研究会
- 12/4 第11回研究員と読む公開輪読会「わが心深き底あり—西田幾多郎と浄土真宗—」担当: 名和研究員 ①12/4 ②12/11 ③12/18 ④12/25 (文京区・東京大学仏教青年会館)
- 12/9 第32回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会 第87回(通算第138回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/11 ご命日のつどい
平成27年度西山学会(禅林寺 永観堂会館): 中村研究員発表「「機法一体」説成立の再検討—證空における「往生正覚俱時」説を中心として—」
- 12/14 第19回『西方指南抄』研究会「天台本覚思想と親鸞」法華仏教研究会主宰: 花野充道氏(千代田区・フクラシア東京ステーション)
- 12/15 第182回英訳『教行信証』研究会
- 12/16 第160回清沢満之研究会
- 12/18 西山深草派宗学院研究発表会(浄土宗西山深草派総本山誓願寺): 中村研究員発表「證空における「光台見仏」論の成立」
- 12/21 第20回『西方指南抄』研究会
- 12/22 親鸞仏教センター報恩講

■ 2016年

- 1/8 ご命日のつどい
第11回研究員と読む公開輪読会「すでにして悲願います—『教行信証』「化身土巻」を読む—」担当: 藤原研究員 ①1/8 ②1/15 ③1/22 ④1/29 (文京区・東京大学仏教青年会館)
- 1/13 第33回『教行信証』「化身土巻・末巻」研究会 第14回親鸞仏教センター研究交流サロン「対話とは何か—哲学から現代社会への問いかけ」慶應義塾大学文学部教授、哲学者: 納富信留氏、埼玉大学名誉教授、経済学者: 暉峻淑子氏(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/14 第88回(通算第139回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/25 第21回『西方指南抄』研究会
- 1/27 第183回英訳『教行信証』研究会
- 1/29 第161回清沢満之研究会

掲載論文

- 1月 『中外日報』2016年1月6日付
名和研究員「西田幾多郎と『教行信証』—「聖典」各所に書き込み確認—